

Michael Agar 1980 chapter 6 Narrowing the Focus, *The Professional Stranger: An Informal Introduction to Ethnography*. Academic Press. pp.119–136.

マイケル・エイガー「第6章 焦点を絞る」『プロのよそ者：民族誌へのインフォーマルなイントロダクション』

## 第6章 焦点を絞る

・民族誌の焦点を絞ることは人類学者にとって痛ましい操作でありうるが、社会科学の目標に関与するためには必要である。

- 一つの目標は懐疑的な外部の人に、結論を確信するように説得する証拠の提示だ。インフォーマルな作業を通じて学んだことの多くは、洞察と直観に基づく。しかし、経験を共有しない他者をいかに説得できるのか。

### 人々をサンプリングする pp.120–125

・通常、部外者と関係を持つ人は少なく、人類学者はキー・インフォーマントと呼ばれる人からあるコミュニティについての情報を聞き出すことになる。

- 情報を精査する体系的なテストを行うためにはインフォーマントの幅を広げることが必要になる。

・ランダム・サンプリングという一つのやり方があるが、情報の提供にはラポールが関係することから、人類学者にとってそれができない。

- ランダムに選んだインフォーマントが薄い情報しか提供しないこともありうる。
- 解決策として、調査者がよく知っている人ではない派閥からフィールドアシスタントを雇い、彼を通じて対象集団にアプローチするという方法がとられることがある。

・サンプルの階層化に伴う問題

- 例：ある郊外の街で、多くがアングロサクソン系米国人で、メキシコ系やアフリカ系の人々が少ないときでも、もし街についての考えの民族的な差異について関心があるなら、人口比の数に比べて、それぞれの民族を過剰に代表 (overrepresent) させなければならない。
- 研究者はしばしば、性別、年齢、民族、教育、などの変数に基づいて階層化するが、過度の単純化の問題がある。例：「性別」←ホモセクシャル、バイセクシャルはどうするのか etc...

→解決策：対象の人々が用いる変数を使う

・カテゴライズの問題

- 例：ドラッグ使用者についての研究において、ディーラー、非ディーラーの間の線引きをどうするか。

→Preble と Casey 研究では7種類のディーラーに分けた。これは研究が終わるまではわからないことである。

・追及するトピックが集団の数人の専門家だけに知られてるとき、広範なサンプルは意味をなさない。

- 例：著者がヘロイン中毒者の民間伝承について調査していた時、長いナラティブを物語るができる人はわずかしかなかった。

#### ・サンプリングのデザインの問題

- 著者の指導学生が、NYのある通りにおけるメサドン (methadone)<sup>1</sup>使用者の体系的なテストをしたいとする。彼は次の様な変数を考えている：年齢、使用年数、民族、居住区、メサドンの診療所への近さ、診療所登録歴、中華街での接触、ヘロイン中心のストリートライフへの態度 etc..
- 著者はここで止める。これら変数のそれぞれが、メサドンの使用への個人の志向における差異を作り出す。

例①：民族といっても定義が難しい

例②：居住区は必ずしもセンサスによって定義されない。むしろ、人々が都市の異なる部分をどのように分離された空間へと一括 (lump) しているのか、そしてそれぞれの一括が何を学ばなければならない。

- 12 の変数について、それぞれが 2 値を持つとしても、4096 通りのサンプル枠組みができ、それぞれ 5 人ずつ選ぶなら、20480 人にインタビューしなければならないことになってしまう。
- 解決策：①数少ない事例の相互関係を理解する  
②同一集団を調査する別の民族誌家と協力する（最終章で取り上げる）

#### ・サンプリングデザインの問題への対処

①理論的サンプリング：民族誌家が、手持ちのものと比較できるデータを意識的なやり方で得るために次のインフォーマントを選ぶ

- 例：農業に従事する 4 人の男性に事象の流れの解釈について聞き、実際に観察する。次に村の向こう側の男性 4 人に短いインタビューと観察を行う。これは最初のサンプルによって与えられた説明との類似性をチェックするため

---

<sup>1</sup> ヘロイン中毒の治療薬

### 理論的飽和<sup>2</sup> (theoretical saturation)

- 新しい情報がなくなったら別の対象に移行する。例：土地を持っていない男性の集団、女性の集団 etc...
- 類似や差異の同定のために十分な集団数、すなわち飽和の明確な基準はない。

### ②一切れのデータ (slice of data)

- 他の研究との接続  
例：同じ集団を対象とした別の人の民族誌、同一テーマのサーベイ研究や心理学研究の結果に解釈を加える

・前章までで論じてきたインフォーマルな民族誌的戦略に加えて、他の研究との関係を示すことができる。

## 事象 (event) をサンプリングする pp.125–126

- ・いかなる事象をサンプルするのかを決定
  - 例：結婚式、
    - ①直接観察
    - ②過去に行われた事象についてインタビュー
    - ③仮定の行事について質問→人々のサンプルの問題も入ってくる
  - 事象について調べるとき、これらの三種類を組み合わせることができる。
- ・留意点：時間の問題には繊細になる必要がある。
  - 例…収穫量が異なるという理由で結婚式のやり方が前年と異なるかもしれない。結婚式が特定の期間に行われるとして、その期間の前後で人々の熱狂度が異なるかもしれない、朝に行われるものと午後に行われるもので有意な違いがあるかもしれない、etc...

## 分布 pp.127–132

- ・統計学では分布の問題がある。
  - 例：通りにおける事象についてジャンキーの説明が変わった。説明を比較することで、変化の主要な理由が、ヘロインからメサドンへの移行であることが明白である。そこで、「通りにおいてメサドンはヘロインにとって代わろうとしている」という民族誌的な主張をするとする。
  - 50人のメサドンのプログラムに参加してない麻薬中毒の男性に、先週に何度メサドンを使ったのかを聞く。正確な母集団を特定できないのでこれを「偶然のサンプル」(casual sample) という。違法な行為についての質問も含むのでラポールも関係する。

---

<sup>2</sup> Glaser and Strauss 1967 *The Discovery of Grounded Theory*. Chicago: Aldine.

・民族誌的主張（：「通りにおいてメサドンはヘロインにとって代わろうとしている」）が明確に支持される場合（表 1）。

表 1

| 一週間当たりの使用回数 | 7  | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 |
|-------------|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数          | 48 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

・主張を支持しないので、別のことをしなければならない（表 2）。

表 2

| 一週間当たりの使用回数 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1  | 0  |
|-------------|---|---|---|---|---|---|----|----|
| 人数          | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 7 | 11 | 29 |

・両極に分離しているが、下位集団に分類することで、限定的に主張が支持される可能性がある（表 3）。

表 3

| 一週間当たりの使用回数 | 7  | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0  |
|-------------|----|---|---|---|---|---|---|----|
| 人数          | 11 | 8 | 5 | 1 | 2 | 2 | 7 | 14 |

- 例えば、古顔（1960年代から使用していた者）と新入り（1970年代になって使用し始めた者）に分けて以下のようなになれば、メサドンへの移行という主張は新入りについて妥当であることがわかる（表 4）。

表 4

| 一週間当たりの使用回数 | 7  | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0  |
|-------------|----|---|---|---|---|---|---|----|
| 古顔（60s から）  | 0  | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 6 | 14 |
| 新入り（70s から） | 11 | 7 | 5 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0  |

- 再び人々に話を聞いたり、手持ちの他のカテゴリ情報（年齢、性別、民族など）で分析したりする。

・ランダムだが、60年代にはメサドンがほとんど使用されていなかったということと比べると、現在されるようになったという意味を持つ（表 5）。

表 5

|             |   |   |   |   |   |   |   |   |
|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一週間当たりの使用回数 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| 人数          | 6 | 7 | 5 | 7 | 8 | 8 | 4 | 5 |

・実験モデルや統計学を民族誌的フィールドワークの中で直接用いることはなくても、民族誌を書く上でメタファーとしても有用である。

### 体系的なテスト pp.132–134

・著者は行わなくて済むのであれば避けて通りたいと考えているが、人類学以外の社会科学では、心理学的検定、社会学的アンケート調査などがある。

- 民族誌家にとっての問題はそれをいかに順応させるかということ。
- 適切な時期に民族誌的フィールドワークの一部として行われるべき。

・体系的：それぞれのインフォーマントの振る舞いが同一の枠組みに当てはまる。枠組みが同一であれば、インフォーマントの間の差異は彼らの反応によるもので、枠組みにおいて変化するものではない。

- 著者はかつてこのフィクションに従っていたが、どんなに統制された状況でも、民族誌家とインフォーマントの関係はこの想定を支持するには複雑すぎる。

・体系的なテストには以下の3点がある。

・①標準化された枠組み：インフォーマルなフィールドワークの利点を覆い隠してしてしまう。インフォーマルなインタビューにおいて重要だった差異を覆い隠す。

- 民族誌的な主張をチェックするのに用いた質問や作業を懐疑的な外部の人が見ることができるようように、提示することができる。

・②反証可能性：インフォーマントが民族誌家の説明の間違いを指摘する可能性がある。

- よい民族誌家は常に結論の誤りを立証しようと努めるが、出版された業績では報告されないインフォーマルなやり方でそれを行っている。

・③公への提示…インフォーマルな場合は難しい。

### フォーマル—インフォーマルの混合 pp.134–135

・多くの方法論に関する文献において、インフォーマルな民族誌的な調査からサーベイへとということが書かれており、本著もそのような方向性をもっている。

- しかし、フォーマルとインフォーマルということに関して厳密な規定があるわけではないし、適正な期間というものもない。

- 両者の統合という研究もある。
- ・フォーマルとインフォーマルな作業の関係は直線的で、一方が他方に対してチェックする関係にある。
  - しかし、両者がどこから始まるのか区別できない時もある。
  - フォーマルなアプローチは民族誌をよくすることもあるが、本書で論じられた手続きをはぎ取るならば、民族誌は完遂されない。

### じょうごを狭める p.136

- ・民族誌の二つの段階として、インフォーマルなアプローチからフォーマルなアプローチへと提示できる。
  - フィールドワークはじょうご (funnel) としてモデル化できる。
  - 広くオープンに学び、学びとチェックを繰り返していく。
  - じょうごの狭い端で、体系的なテストを始める。通常このテストはさらなる問をなげかれるため、再び学習のモードに戻ることになる。